

## わくわくショッピングモール2 サンプル

好きって、すごい

「ん……」

感じる人肌。温かくて、少し硬くて、むき出しの肌に  
ふわりとなじむ。

（なに……？）

目を開けると、裸の胸が目の前にあった。その体が動  
き、額にキスを落とされる。

「おはようございます」

「……え？」

まばたきを繰り返しているうちに、徐々に状況が呑  
み込めてきた。

「恵介さん……」

どうやら松永の部屋で眠ってしまっていたらしい。  
腰がひどくだるい。

「疲れはどうですか。体に痛みはありませんか」

「あ……」

そうだ、恋人同士になって……さっそくセックスを  
してしまった。

（やば……）

いくらなんでも早すぎだろう。たしかに出会いハ  
俗で、告白をする前にセックス以上のことはしてい

けれど。

「達也くん？」

しかし、松永の目を見たらそんなことはどうでもよくなってしまうた。だって、これまでに経験したことのない慈愛に満ちた目で見つめられている。

「大丈夫です」

「よかった、と思ふべきところなんでしょうね」

「え？」

「普通なら。でも、余裕があるならもっとたくさんしてもよかったなと後悔しています」

「あ……」

松永はいったいどれほどの欲を溜め込んでいたのだろう。達也はもう、しばらく勃起しないのではないかと思うほど身も心も満足し、ずんと全身が重くなっているというのに。

熱を残したままの松永の目元がふつと緩んだ。

「でも、今日はお仕事ですからね。テレビで見る達也くんのことでも大好きなので我慢します」

松永が達也の顔に触れた。それから鼻の頭に触れるだけの優しいキス。

「朝食を用意してきます。職場までお送りしますから、ギリギリまで横になっていてください」

「あ、いえ。マネージャーが迎えに来るので」

「そうですか……わかりました」

松永に時間があると最初からわかっていたら——そうしたらマネージャーに断りを入れて、少しでも長く

一緒にいられたのに。

ズボンをはいた松永の背を見送り、慣れない肌触りの布団にもぐる。

(……恵介さんのベッド……)

いつも松永が寝ている、もしかしたらオナニーだつてしているかもしれない場所。

もう性欲なんてすべて吹き飛ばすほど抱いてもらったというのに、艶やかな松永の姿を想像してしまった。

移動中でも、撮影中でも、世界がきらめいて胸がずつとドクドクと脈を打っている。

恋はまさに生きる力。

(俺、本当に彼氏できたんだ……)

一生独り身で過ごすことになるだろうと覚悟していたのに。

(本当に……本当に)

しかも相手はあんなにかっこよくて、優しい人。

松永にプロポーズをされてから一週間。仕事のある日は松永の部屋に帰り、風呂に入れてもらい、手料理を食べさせてもらう。それが日常になりつつあるのに、今でもなんだか信じられない気分。

でも夢ではない。だって同じことを、毎日何度も考えている。

松永の部屋まであと一フロア。

開き始めたドアの隙間に身を滑り込ませるようにし

てエレベーターを降りて走る。

会えるまであと十五秒。

帰宅を告げるまであと十歩、五歩、三――

インターホンを押し、玄関ドアが開く前に呼吸を整えて平静を装う。

「達也くん、おかえりなさい」

「ただいま帰りました」

玄関に引き込まれた瞬間のきつい抱擁。嬉しいけれどファンデーションが松永のシャツについてしまうのが嫌で、理性を総動員させて体を離す。

「お風呂――」

「ええ。用意はできてますよ」

「ありがとうございます」

ほんの数メートル歩くだけでも指を絡めてぬくもりを与え合う。脱衣所に着いたら服は松永の手によつて取り払われるけれど、下着だけは達也が自分で脱がなくてはならない。

「達也くん」

なかなか下着を下ろせずにいる達也に、松永が期待を含んだまなざしを向ける。

「ちんぽ……」

「ええ、ちんぽもしっかり洗ってあげますよ」

だから見せて――そんな含みを感じることで得られる安心感。下着を下ろし、隠すもののないペニスさらす。

松永はじっとそれを見つめ、一つ頷いてから自身の

服を脱いだ。

手を繋ぎ、一緒に浴室に入る。洗顔だけは自分でするけれど、達也が他にすべきことといえば、射精欲にただ耐えることだけだ。

バリバリに固められた髪に指が通るようになり、中心部以外の全身が泡で包まれる。そしてもったいぶるように最後まで残されたペニスの皮がむかれ、特に敏感なところを指先や手のひらでこすられる。

「あっ……ン……」

「達也くんのちんぽは本当にすぐに勃起してしまいますね」

「だって……」

「だって？」

「恵介さんがいじるから……」

松永が笑う。

「いじる？ 洗っているだけです」

本当は腰を振って、松永の手に勃起をこすりつけてしまいたい。それで射精をして——その後はお仕置きをされたい。でも、「我慢ができないちんぽもかわいいですね」とも言われたい。

「恵介さん、ちんぽ苦しい……」

「わかりました。では今夜は射精を許可しましょう」  
ずるいい言い方。ペニスをいじる許可ではなく射精の許可。

早く、乳首の快感を射精につなげられるようになりたい。

「……乳頭、カリカリしてくれますか」

「もちろん。カリカリもなでなくてもクリクリもして差し上げますよ」

「っ……」

想像だけでペニスからこぷりとカウパーがこぼれ落ちた。それを指先ですくい取られ、石鹸の泡と混ぜるように亀頭に塗り込められる。

「あっあ、あ」

「いけませんね。洗っているだけだというのに次から次へとぬるぬるを出して」

微塵も怒りが含まれていないお説教。早く射精したいと思いながら、つい揺らしてしまいそうになる腰を必死に同じ位置にとどめておく。

「さあ、洗い終わりましたよ。お湯に浸かって疲れを取りましょうね。今日はミルクの入浴剤です」

達也が湯に浸かると、体についた泡を流した松永もあとに続く。尻の位置を前にずらして場所を空けると、達也の背後に腰を下ろした松永の腕に抱き戻された。

「支えていますから、力を抜いてゆっくりしてください」

「いつもすみません」

松永はいつも、達也が帰宅する前に入浴を終えている。

本当は松永の体を洗ってあげたいと思う。けれどそれを言うと松永は困ったように笑いながら「それでは達也くんが疲れてしまいます」と言うし、松永が自分で

洗っている姿を見てみたいと言えば、「それでは達也くんがのぼせてしまいますから」と言う。

（甘やかされっぱなしだよなあ……）

食事の用意もしてくれるし、その片付けだって申し出たところで「食洗器がありますから」と言われてしまう。しかしビルトインの食洗器があることはたしかだから、それ以上何も言うことはできない。

「熱すぎませんか」

「大丈夫です」

「ちんぼの様子は？」

「……ちよつと」

「ちよつと、なんですか？」

「……勃起、してます……」

松永の手が達也の陰部をまさぐった。指先がペニスにあたり、さらに硬さを増す。

「あつ」

「今夜はすぐに乳首だけでイってしまいかもしれませんね」

「あ、ン……」

「あんまりすぐに出してしまうようなら、早めにちんぼの栓も覚えましょうね」

栓。尿道ブジー。小さな穴を松永にぐりぐりされる——考えるだけでのぼせてしまいそう。

「アッ、恵介さんっ」

松永の指が、場所を確かめるように亀頭を撫でた。わずかに力の入った指先が尿道口をえぐる。

「ああ……またぬるぬるをお漏らしして……」

「アアッ！」

上体をひねり、たくましい体にすがりつく。

もうイきたい。本当に、一瞬でも気を緩めれば手が勝手にペニスに向かってしまいそうだ。

松永が達也の耳たぶに唇をこすり付ける。

「今夜、台本の確認は？」

「休憩中に覚えてきました」

「泊まりますか？」

普段は役作りがあつたり、台詞を覚えたりがあるので、帰宅から二時間程度この部屋で過ごしたら上階の自室に帰っている。けれど今日はもう戻りたくなかった。

「恵介さんの腕の中で寝たい……」

「かわいい……では今日はちんぼの穴に栓をしたまま私の腕の中でねんねしましょうね」

松永が、四角いケースの蓋を開けた。中には太さの違うステンレスの棒が五本入っている。

（今からこれがちんぼの中に……）

尿道責めの妄想は何度もしてきたけれど、本当にされるのは初めてだった。痛いだろうか。もし中に傷がついたら排尿の度に苦しむかもしれない。万が一、病院に行かなければならないようなことになったら――。

思わずシーツを握ると、松永が達也の頬に触れた。

「不安ですか」



「あ……」

「怪我はさせません。でももし何かあったら提携先の病院に行けるので安心してください」

「提携先？」

「ええ。周りには絶対にバレずに治療ができます。そこではちんぼの改造だってできますよ」

「改造……？」

聞きなれない言葉だ。少なくとも性器について使うような単語ではない。松永が焦らすようにゆつくりと顎をひく。

「M な子の中には、陰囊を残してペニスだけ取ってしまいう子もいるんですよ。そうすると性欲は残るのに、それを解消する術だけがなくなつてずっと苦しいんです」

「そんな……」

性欲はある。けれどペニスがない——どんな気持ちになるのだろう。当然苦しいだろうし、毎日毎時間、後悔し続けることになるだろう。でも恋人がいれば、それだけではないような気もする——。

「ああ……想像してしまいましたか？　ちんぼがまたお汁を垂らしていますよ。達也くんもちんぼを失いたいんですか」

松永が小さな子どもを見るような目でペニスを見つめる。

「あ……そんな……」

でも、想像だけなら楽しいかもしれない——。

松永が消毒液と書かれた個包装の袋を取り出した。

いよいよペニスに異物を入れられる。

「痛かったら言ってくださいね」

そうだ、今からされるのはペニスを奪われることではない。尿道に異物を入れられる——現実的なことなのだ、と頭を切り替える。

「……あの」

「はい」

松永はいつも、たとえ行為の途中であっても達也が真剣に呼びかけると動きを止めて目を合わせ、言葉を待ってくれる。

「恵介さんの……」

先に、アナルを松永のもので埋めてほしかった。だってペニスをいじられるだけではもう足りない。ぬくもりも欲しいし、一つになるという行為は快感だけでなく安心ももらうことができる。

「私の？」

わかっているくせに。その証拠に松永の口の端が意地悪に上がっている。

「……欲しい」

「何を？」

オナニーのおねだりはできるようになったのに、挿入をねだる言葉はまだ恥ずかしい。

松永が手にしていた袋をシートに置いて、寝転んだ達也の頭を囲うように両肘を左右についた。見下ろしてくる松永のたくましい二の腕を握る。

「恵介さんの……入れて」

「それではわかりませんね」

松永の目が肉欲に光る。興奮してくれている。でも、それなら入りたいと思わないのだろうか。

(言葉なんて待てない、さっさと入りたいって……)

もつとがつついてほしい。わき目もふらず、がむしやらに求められたい。でも今の自分には、そこまで松永を夢中にさせることはできない。

「何でもかまいませんよ」

「え？」

「達也くんと同じ『ちんぽ』でも」

「あ……」

松永のペニスを何と呼ぶか、という話だと気付く。

松永の頭に腕を回して軽く引き寄せる。力も入れていないというのに、松永は達也の口元に耳を寄せた。達也と同じシャンプーの香りがする。

松永は達也が言葉を発するのをじっと待っていた。

「……おち……おちんぽ……」

松永の大切なものを、達也と同等のものとして扱うことはできない。けれど同じがよかった。

「ああ……かわいらしい。達也くんは私のペニスをおちんぽと呼びたいんですね」

松永が嬉しそうに笑い、達也の額に頬ずりをした。

「恵介さん……」

「もう一度ちゃんと教えてください。何をどうしてもほしいんですか」

「恵介さんのおちんぽ、俺のお尻に入れてほしい……」

「ああ……」

松永が達也の首筋に顔をうずめた。耳の穴に熱い吐息が入ってきてぞくりと震える。

「達也くんは欲張りですね。お尻の穴にもちんぼの穴にも入れてほしいなんて」

「あ……」

松永が上体を起こし、自身のペニスに手早くコンドームを装着した。ローションを塗りつけ、すでに硬くなっている先端を達也のアナルにこすりつける。

「あ、あつ……」

風呂上がりに毎晩アナルジュエルを挿入されているそこは、慣らす必要もなく松永の勃起を受け入れる。

「んあつ……ああ……んう……」

言葉にならないほどの圧迫感。

「お尻、とろとろですよ」

ぬぶ……とパンパンに張った亀頭が中に入ってくる。痛みはない。そのことがさらなる興奮を呼ぶ。

「アアッ！」

「通常、締め付けがあるのは肛門だけでナカはほとんど空洞なのに、達也くんここはまるで私の精液を搾り取ろうとするように絡みついてきますね。どんなオナホールよりも気持ちいいですよ」

「あ……あつ……」

オナホールとの比較。まるで達也のアナルをオナホールだと思われているみたい。

（恵介さんのオナニー用のおもちや……）

松永が快感を得て、精液を吐き出すためだけのおもちゃ。松永が欲望を満たすただけに使うもの。

「あ、だめっ、だめっ、アアアッ……！」

動かれてもいないのに突然喘いだ達也に、松永が小首をかしげた。

「達也くん？ どうしました？」

「あ……恵介さんっ、俺、オナホっ」

達也の途切れ途切れの言葉に、松永は一瞬不思議そうな顔をしたがすぐに合点した様子で頷いた。

「達也くんは私のオナホになりたいんですね」

「んっ……」

「かわいい……恋人のオナホになりたいなんて……」

松永のペニスが根元まで埋まった。それはいつもより太くて硬い。

（恵介さんのおちんぼ入ってるっ……俺のお尻で気持ちよくなってるっ！）

なんて淫らなのだろう。友人たちに吸血鬼と言われるほどの美貌の持ち主が、勃起を入れて快樂を得ているなんて。

「本当にかわいい……」

「ああっ、恵介さんっ！」

興奮が高まりすぎ、ギンギンになったペニスが痛い。

「恵介さん、ちんぼ、ちんぼ苦しいっ！」

「お腹に水たまりができてますよ。早く栓をしてあげないといけませんね」

「あっ……」

そうだった、すっかり忘れていた。尿道責めの前にペニスを入れてほしいとねだったのだ。このままセックスをするわけではない。

「さあ達也くん、お漏らしちんぽに栓をしますよ。ちんぽのどこからお汁が漏れてるのか教えてください」

「やあっ！ 恵介さんっ！」

もう興奮は最高潮なのに。これではブジーを入れるられる前にイってしまう。

「ちんぽっ！ ちんぽがっ……！」

先に一度イきたい。イかせてほしい。だってこのままではもたない。壊れてしまう。

しかし松永は達也をイかせるつもりはないようだった。

「さあ達也くん、私にちんぽの穴を見せてください」

「あ……」

「できますか？」

「……はい」

気を抜けば、手が勝手にペニスをしごいてしまう。そうならないように理性を総動員させて指先だけでペニスをつまみ、皮をむく。腹につきそうなほど反り返った勃起を親指で押し上げ、尿道口を松永に向ける。

「恵介さん、ちんぽの穴っ……」

「濡れすぎて穴がよくわかりませんね。お汁を少し拭きましよう」

「あ……ああ……」

松永がガーゼを折りたたみ、達也の亀頭をそっと包

んだ。ざらざらしたそれが曖昧な刺激を与える。

「あ、すごい……ちんぼ……ちんぼ……」

ちんぼが。ちんぼが——もうそれしか浮かばず、壊れた音源のように繰り返す。

「ふむ……達也くんがちんぼは本当にお漏らしが多いですね。せつかくですから達也くん自身のお汁で中を広げましょうか」

「えっ……？」

どうということだろう。カウパーをローションのかわりにするという意味だろうか。

「タンポンのようなものがあるんです。水分で膨らむ紐を尿道に入れて、自然にそこが広がるのを待つのです」

「そんな——」

「抜く時はちゃんと水分を足して、じゅうぶんにふやかしますから大丈夫ですよ」

亀頭にかぶせられたガーゼが外される。離れようとする二つの間を透明な糸が繋いだ。松永がそれを指ですくい、接続を切る。とろりと垂れたそれは、達也の腹に落ちた。

「でも達也くんなら、私とセックスしている間にじゅうぶんふやかすことができますが」

松永が笑いながら、細い個包装の袋をケースから取り出した。

「さあ、ちんぼにタンポンを入れましょうね」

袋から取り出されたそれは、五ミリ程度のプラス

チック棒だった。松永が慣れた手つきで「滅菌」と書かれたローションを塗りたくり、まだ何も知らない尿道口に添える。

「……あ……」

「達也くんのちんぽはまだ童貞なのに、ちんぽの処女を先に失ってしまいますね」

松永が、自身の勃起の存在を示すように数回腰を振った。アナルももう処女ではない。そしてペニスも――。

「あ、ああ……ああ……」

てらてらと光るプラスチックが尿道にゆつくりと進入を始めた。大切なところを暴かれる背徳感。それなのに痛みはなくて、そのことに戸惑う。

「達也くん。もしかして自分でここをいじったことがありましたか」

「え……？」

「とても上手に飲み込んでいるので、慣れているのかと」

「ないですっ！ 恵介さんにローションを入れてもらっただけ……」

あれは本当に気持ちよかった。あのときは痒みのローションだと思っていたからそれどころではなかったけれど、今思い出すと硬さのある液体が、本来なら出ていくだけの場所に逆流してくる感覚は異様なほど気持ちよかった。しかもそれがデート中に漏れ出すというのがたまらなかった。



(またしてほしい……)

次は膀胱まで入れて、尿のように出させてほしい。そのときはあのガラス張りのトイレで、松永に背後からペニスを支えていてほしい――。

「達也くんの穴はどこも、入れてもらうのが大好きなんですわね」

タンポンはもう、半分ほどがペニスの中に埋まっていた。どこまで入れるのだろう。そろそろ根元に着くはずだ。

「痛みは？」

「ないです……」

それがまた淫乱みたいで恥ずかしかった。本当は痛いものなのだろう。でも達也の体は悦んで受け入れてしまっている。

「上手にごっくんできていますね。ではアプリケーターを抜きますよ。中の吸収体だけがちんぽに残ります。水分を吸うとかなり大きく膨らみますから、完全に膨らみ切る前に出しましょうね」

「ん――あああああっ！」

硬さを感じる吸収体を内部に残し、用を終えたプラスチックが尿道をこすりながら外へ出て行く。射精のような、けれど射精とはまったく違う快感。

「ああっ！ アアア！」

「ああ……すごい締め付けです」

松永がゆるく腰を振る。前と後ろ、どちらの穴も気持ちいい。

「あつ、あつ！」

タンポンのケースが最後まで抜けた。ものすごい喪失感。もう一度入れてほしい。それでもっと中をこすってほしい。

「やだっ……」

「達也くん？」

「ちんぽ足りないっ……！」

「大丈夫、ちゃんと中には吸収体が残っていますよ。見てください」

松永に促され、頭を上げてそこを覗き込む。確かにペニスの先端からはたこ糸のような紐が垂れていた。でもそんなものでは全然足りない。早く硬いものを入れててナカをこすってほしい。

「やだっ！」

「達也くん、自分で乳頭をコリコリしてみてください。お汁をいっぱい出せば、今より太くなりますよ」

「本当……？」

「ええ。今日は射精だって許可していますから——ああ、でも射精をしたらお汁が出なくなってしまうですね。どうしましょうか」

ずるい。そんなふうに言われたら射精はまた今度でいいと思ってしまう。それが松永の策略だとわかっていても、聞いてしまった今、もう射精なんて望めない。だって尿道をこすられる快感を知ってしまった。だから今度はただこすられるだけよりも、尿道を広げた状態でこすられるのを経験したくなっている。

「射精か、ちんぼの穴を広げるか——私はどちらでもいいですよ。達也くんが決めてください」

やっぱり。松永は達也が何を望むかすべてわかっている。本当は選択肢なんてないのに、まるで達也が選んだように見せかけようとしている。

でも、そういうところが好きだった。先回りして快感と興奮をくれる。全部用意しておいてくれている。

「……ちんぽ」

「はい？」

「ちんぼの穴……」

ああ……と松永が熱い吐息をこぼした。

「本当に変態ですね。もっと太いものを咥え込めるようになったら、中心が空洞になったブジーを挿したままデートしましょう」

本編9万8千字です。

よろしくお願いいたします！

©goneone (ちーわんわん)

2024/ 2/ 27

メール:goneonegoneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter:@goneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。